



JNEPS
Japan Natural Environment Protection Society

しぜんかんきょう

第二号

発行：一般社団法人日本自然環境保全協会 45-0063 神奈川県横浜市戸塚区原宿 4-25-7 URL: www.jneps.net Mail: info@jneps.net 発行人：森下茂男

古紙比率 70% 以上の再生紙を使用しています。

逗子・葉山特集

Photos by T. T

逗子・葉山といえば、何を連想するだろうか？逗子の代表的なビーチ、逗子海岸には岡本太郎と石原慎太郎の「太陽の季節のモニュメント」がある。「太陽が生まれたハーフマイルビーチ」は、関東で一番早く海開きする海水浴場であり、日本一規制の厳しい海水浴場、そして関東近郊の海がきれいな海水浴場ベスト 5 に入った海岸といわれており、毎年 33 万人の海水浴客が訪れている。そして、葉山には大正天皇がご静養された葉山御用邸があり、この御用邸の前にある一色海岸は CNN の世界厳選ビーチ 100 に選ばれた静かで美しいビーチだ。このふたつの街の住人には、誇れる美しい海がある。

逗子と葉山、それぞれに個性豊かな街で、海辺の環境改善と再生に取り組む人々を追った。

しかし、このふたつの海辺の街で、今、一番の問題が磯焼けだろう。ワカメやひじき、カジメなどが育たず、さらにウニの大量発生でさらに磯焼けが進み、小魚たちも寄りつかない海の砂漠化という問題が起こっている。この海の自然環境の悪化は、地球温暖化による海水温の上昇など世界規模の問題であり、環境保全と再生に取り組む人々の口からは異口同音に「でも、できることからやらなくては」という言葉が聞こえてくる。磯と砂浜が混在するこの海辺の街の住人たちは、「子どもたちに、より良い自然環境を残さなければ」という切実な思いで、海の自然環境の改善と再生に取り組んでいる。



後援：逗子市、逗子市観光協会



Photos by T.T

葉山の海中のがれきの撤去作業を手伝う
参議院議員の浅尾慶一郎さん

「海岸の管理者は、国から委託を受けた県ですが、 県が先進的な思いを持って 対策を講じているかどうかですね」

参議院議員 浅尾慶一郎さん



インタビューを映像で観る

Q: 海岸法が 1999 年に改定されて、今までは「防護」という形で、消波ブロックを積み上げていましたが、それにプラスして「利用」と「環境」に配慮しなければいけないという改定がなされましたが、今後の展望として、消波ブロックの配置替えは可能ですか？

浅尾: 今ある消波ブロックの配置替えは可能だと思います。ただし、潮の流れが変わったり、漁業の関係も変わってきている部分もあります。入れた後に発生した漁業権がどうなっているか調べる必要があります。また、消波ブロックを動かすことに反対する人も出てきます。それが防護ということ以外に、商売上で反対する人がいるのかどうか、ケースバイケースになるとは思います。

Q: 小田原に潜堤と呼ばれる海中の堤防が設置され、そこが海底牧場のようになり、カジメなどの海藻が付き、新しい漁場になったという報告があります。ひとつのいい雛形になるのではないかと思います。潜堤に関してお考えはありますか？

浅尾: そうですね。そういう形で新たな漁場になっているところは、むしろそっちのほうにしていこうということだと思います。ですので、今の消波ブロックがどういう状況になっているのか、環境面以外は、ちょっと調べてみないとわかりませんが、問題がなければ、今おっしゃった潜堤という形が一番いいという気がします。

Q: 水産庁などの担当省庁でも、潜堤にしたほうがいいという論文が出ていますが、消波ブロックの積み上げを新しい法律に基づいて代えていくということは、難しいですか？それとも、消波ブロックが環境に負荷をかけているというのがわかれば、代えなくてはいけない事業のひとつになるのでしょうか？

浅尾: 法律面と、予算面の両方なんだろうと思います。環境に負荷がかかっているということがちゃんと証明されれば、あとは予算の措置をどうとってくるのか。小田原のような例のように、予算も潜堤を入れることで、新たな仕事が発生できる形が一番いいと思います。

Q: ということは、変更することによって新しく漁場を作ったり、養浜によって利用可能な砂浜ができ、それが、効果があるという科学的なデータがあれば、全国的に広めていく雛形を神奈川県から発信していけるのでは？

浅尾: そうですね。逗子海岸はウミガメが産卵に来るという話もありましたが、今はだいたい砂浜が削られて養浜しないとダメです。ですから、そういうところと合わせて元の産卵場所として復活させることができれば、非常にいいんじゃないかなと思います。

Q: 行政の仕組みですが、国や神奈川県、そして市とありますが、どこに提案するのが一番いいのでしょうか？

浅尾: 海岸の管理者は、国から委託を受けて県がやることになっていますので、やはり県ですが、県が先進的な思いを持ってやっているかどうか。先進的な事例ができれば、『ここでできているんじゃないか』という言い方ができるかなと思います。神奈川や静岡、千葉など、どこかでそういう動きを作っていくことが大事です。先ほども言いましたが、小田原のような具体的な例を示す担当者に宣伝してもらえば、一番いいんだろうと思います。さっき漁業の話をしましたけど、なかで取れる魚の種類がだいぶ変わっているという話もありますよね。だから、そこも地球全体の温暖化の影響なんだろうと思いますけど、できる限り、もといた魚を戻せるように、どういうことをしていくか。その流れの中で、消波ブロックではなく、違う形のほうが元の環境に近いということに繋げていくのが一番いいやり方だろうと思います。

Q: すでにいろいろな場所で海底牧場構想が始まっているというデータがありますが、神奈川県も積極的に海底牧場構想を取り入れていくという方向にいけるような知恵などがあれば教えてください。

浅尾: そうですね。漁業も単に獲るといところから海底牧場のような形で、育てる漁業に変えていかないと、世界的にも魚を食べる人が増えてきていますので、厳しいことになっていくのだと思います。そこを何とか海底牧場計画みたいな形で補っていければと思います。

アイデアルリーフとは、理想的な礁でも訳せばいいのだろうか。NPO アイデアルリーフ代表の田中俊樹さんのサーフィン歴は 50 数年、10 代の学生時代に鎌倉の稲村ヶ崎から始まった。1970 年初頭、日本で初めてサーフィンをスポーツとして大学内にクラブを設置したという。現在は葉山に移り住み、週 1 日は海に入り、一色海岸と海中のゴミ拾いを日課にしている。そんな田中さんが NPO アイデアルリーフを設立するという思いに立ったのは、1996 年逗子市の市制 40 周年の記念行事の実行委員長を任されたことがきっかけだった。「10 の部会の 1 部会が、逗子海岸の西の端に建つ石碑の調査をしました。この徳富蘆花の不如帰（ほととぎす）の石碑は、江戸城を築造するために真鶴から運んでいた船が大崎沖で難破し落としてしまった百人持ちと言われた安山岩のひとつだったのです。現在は、大崎沖の海底には数多くの安山岩が投石されていて、そこは海藻類や貝が豊富に育ち、魚たちが集まる理想的な魚場、海底牧場ができていました」

それは、すでに昔から小坪の漁師たちのあいだでは広く認識されていたようだ。難破船の積み荷であった真鶴の安山岩（別名小松石）が良質の漁場、豊かな海底牧場を作りだしており、海底牧場を作るには真鶴の安山岩を入れれば効果があるという事実だった。そこで、昭和 37 年から小坪の漁師たちが自費で安山岩を真鶴から買ってきて、まず大崎沖に入れたという。5 年後には、逗子市と県と国から助成金が出て、平成 11 年まで 19 回にわたり大量の安山岩が大崎とカブネの礁の脇に投石事業がおこなわれていた。田中さんは、個人的にさらにこの調査を進め、逗子の情報公開で集めた投石事業の海底図を見て、もうひとつの事実を知ることになる。

そこは、サーフィンの世界大会が開催された逗子マリーナ沖の「カブネ」と「大崎」と呼ばれる、私たちの税金でできた海底牧場構想を持ったサーフゲレンデになっていたのだ。「安山岩を投石した場所が、サーフゲレンデになっているというのがわかったことが NPO アイデアルリーフの出発点でした。自然環境を保全

しながら、自然素材の安山岩などを利用して、デザインされた磯（潜堤）にカジメやアマモなどの海藻類を植え、自然環境を再生する『磯焼け対策』としての海底牧場が作れる。さらに、安全に子供たちも遊ぶことのできる波をデザインできることを知りました。この事実は例えば、ひと昔前に過疎地と呼ばれていた雪山にスキー場ができて街が活性化したように、海底牧場と波をデザインすることにより活気のない海辺の街に再び人が集まり、地域が活性化するのではないかという提案なのです」

田中さんが NPO アイデアルリーフを設立したのにはもうひとつの理由がある。「1999 年に海岸法が改正されて、法律的に防護だけを目的とした海中構造物にプラスして、環境と利用に配慮しなければいけなくなった。ということは、今まで施工してきた消波ブロックを積み上げた工法は、法律違反になるのでは？ 1999 年以前に設置された防護だけの目的で配置された消波ブロックは、科学的データに基づいて環境に負荷を与え、景

観を損ねているということがわかれば、海底牧場構想をもったデザインに配置換え、変更することができます。国は海岸の管理を県に委託していますから、県が中心になって早急に海の自然環境の再生に向け、公共事業のひとつとして前向きに対応することが望めます」

最後に、田中さんに抱負を語ってもらった。「今後は、海の環境に負荷をかけていると思われる消波ブロックの積み上げ型工法の設計変更を管理者の県に要望し、『磯焼け対策』として魚たちが集まる豊かな海底牧場の造成が可能なブーメラン型の潜堤の設置です。波のゲレンデは地域の活性化につながる新たなビジネスモデルとなります。この提案を神奈川県だけでなく、日本全国の海を持つ地方自治体に情報発信していきたいと思っています」



インタビューを映像で観る

「いつものサーフゲレンデが豊かな漁場の 人工リーフであることを知ったことが、 NPO アイデアルリーフの出発点でした」

— NPO アイデアルリーフ代表 田中俊樹さん



Photo courtesy: T. Tanaka

海を愛する者なら、サーフィンを終えた後のビーチクリーンは身に付いた習慣となる。一色海岸のアイデアルリーフの田中俊樹さん

自然環境問題に取り組み、まい進する神奈川県議会議員として4期目の近藤だいすけさんの原風景は大自然とともにあった。「僕は、生まれは宮城県の南蔵王の山麓の山猿なんです。自然豊かなところで生まれ育ちました。その後、父親の仕事の関係でサウジアラビアに家族で行くことになって、7年間いました。サウジは年に2回くらいしか雨が降らなくて、陸上の汚いものが海に流れないということもあり、前人未到の紅海の美しい珊瑚礁で毎日泳いでいました。僕は幼少の頃に自然ともろに触れ合ってきたので、そういう意味では、本能的に自然と共にあるということが、多分僕には植え付けられているのだと思います」

近藤さんがサウジアラビアから逗子に引っ越してきたのは中学1年生の時、以来逗子に住み、現在は葉山に居を移しているが、近藤さんが議員になろうと思ったきっかけは、やはり自然環境を守るためだったという。「23、24年前、逗子市は、今のように開発の手続きが厳しくなくて、ときの市長が、高さ制限の緩和、建ぺい率や容積率の緩和など、開発基準を緩和しました。海岸線に至るマンションなどもほとんどがその頃のものですし、あと斜面地を削ってどんどん宅地化されて、そのときに僕が遊んできた逗子・葉山の緑がどんどん失われるという危機感を感じました」

近藤さんのフェイスブックを見ると、ほぼ毎週末に海岸清掃やウニの駆除、海藻類の種付けなどのボランティア活動を続けていることがわかる。ボランティア活動と議員活動、近藤さんの人生のほぼすべてを自然環境の保全や再生に捧げているような印象すら受ける。そんな環境活動家、近藤さんが第一に自然環境を守ろうと思っている場所はどこなのだろう。「始まりは田越川からでした。議員になる前からやっていたので、川掃除を始めて今年で26年、やり続けています。最近は田越川もきれいになったので、川の清掃は年に1回です。まず海、河口エリア、そして逗子駅周辺の下流エリアと、その次は中流と上流エリアの3エリアにわかれて、市民の方々、市内在勤在住の人たちや企業に声をかけて、米軍の方も

来てくれて、今年は400人ぐらいで清掃しました。回収ゴミを計っていますが、今は昔の最大のゴミ量の10分の1ほどに減っています。上流域では蛸が生息するまでに自然環境が改善しました」

近藤さんが議員のライフワークとして取り組んでいるのが海岸浸食対策だという。「平成23年に策定された相模灘の海岸侵食対策計画ですが、この計画は僕が作ったという自負があります。神奈川県は、消波ブロックに頼らない海岸の防御を標榜しています。海岸浸食対策では、なるべくコンクリートによらない元の砂浜の状況に戻したうえで、その海岸の高潮対策だったり防護、うしろの構造物を守る工事を行っています。毎年6、7億の予算を計上して養浜対策をしています」

ライフワークだと自負する近藤さんの海岸侵食対策のいちばんの功績は長者ヶ崎の海岸保全事業だろう。「もう20年ほど前の計画でしたが、僕が県議会議員になる動機になりました。その頃、僕は逗子の市会議員で、『スカウミ』というローカルサーファーのグループが相談に来ました。そのとき、長者ヶ崎の国道が崩落して、応急工事をするということで、沖合に100mと120mの防潮堤のコンクリートバーを作るという計画でした。でも、防潮堤は必要ないと反対運動をはじ

めていて、漁師さんたちも声を上げてくれたのが大きかったですね。結局、貝や海藻が取れるエリアだったので、漁場が死なないように、砂ではなく、今の礫養浜になりました」

最後に、これから議員活動と個人として、近藤さんは逗子・葉山の自然環境にどのようなビジョンを持っているのだろうか。「環境の部分で言うと、やはり山・川・海の連続性を取り戻したいということです。あと、自然と共生するために、住民の協力や労力を厭わないという考え方が必要です。何が言いたいかというと、行政任せにしないでくれということ。これだけ大きな海で磯焼け対策をしています。『そんなの、効果があるの?』と言われることですね。ただ、着眼大局で着手小局なわけですよ。だから点では、土木工事を見ない。事前に実態を見て、具体案を形にしていきたいと思います」



保全活動を映像で観る

「山・川・海の連続性を取り戻すことが、自然環境の保全と再生につながるのです」

—— 神奈川県議会議員 近藤だいすけさん



議員活動以前の26年前から田越川の清掃を続ける近藤だいすけさんの環境活動家としての原点がここにある

Photo courtesy: Kondo's Facebook

Q: 潜堤（海中に潜った堤防）のデザインを始めたきっかけは？

鈴木: この研究の背景には、20年ほど前に徳島県や和歌山県のサーフィン愛好家の方々から、「人工的にサーフィンができる構造物ができないのか?」ということから始まりました。もうひとつは、ちょうどその頃、カリフォルニアやオーストラリアのゴールドコーストで人工サーフィンリーフが作られた時期でした。

Q: 日本でも200万人ほどのサーフィン愛好家がいるので、今後の街づくりの新しいファクターとして有効ではないかと考えています。そこで、今後広く海辺の街に応用されていくためには、今大問題となっている「磯焼け」を考慮した「潜堤」を考えていくといいと思いますか？

鈴木: 「磯焼け」は、基本的には「環境問題」だと思っています。一方で、防災面からみると、今後海面上昇や台風の巨大化が進んだ場合、場所によっては、新たに潜堤や離岸堤を設置する必要があると思います。そのとき、「磯焼け対策」として材料面などを検討すると、「防災」と「利用」と「環境」を含めた多目的な利用ができてくると思います。

Q: 逗子では昭和37年から「海底牧場」作りとして、真鶴の安山岩の投石事業が行われ、そこでサーフィンの世界大会が行われたという歴史があります。もう一度、海底をスキャンして、どういう形の磯が自然環境に適している、なおかつ波があるときには利用できるという構想が、今後必要になってくるのでは？

「潜堤は、波の条件や潜堤の形によって有効性が変わってくる場合があります」

—— 波の専門家、鈴木高二朗さん



プロフィール

鈴木: 今、おっしゃられたような岩礁周辺の事例は、ひじょうに参考になると思われます。

Q: 小田原にはすでに「潜堤」が「御幸の浜」にあり、そこにかんりの藻場ができていて、新しい漁場としてすでに多くの魚たちが戻ってきたという報告と論文があります。今後、データとして広めていく必要があるかと思っています。

鈴木: 小田原の事例も「環境面」あるいは「利用面」でひじょうに参考になる事例だと思いました。

Q: 「環境」の中には「景観」というものもありますよね？

鈴木: 「景観」も重要な「環境」の話だと思います。ただ、「潜堤」は波の条件や「潜堤」の形によって有効性が変わってくる場合もあります。とくに、これまでではどうしても実験上の問題として、まっすぐの岸に平行な構造物しか考慮することができなかったのですが、今後は面的に屈曲した構造物なども実験や数値シミュレーションと合わせて検討することで、より効果的な構造物として設計できるのではないかと考えています。

Q: 先生の設計されたサーフィンリーフが、大きな浜辺の街づくりの基本になる設計やデザインだと思いますか？

鈴木: 現在では海岸港湾構造物を造るときに、来襲する波の条件をどういうふうに決めるとか、沖の波が決まると、今度は、構造物のところにどれだけの大きさ

の波が来るのかなど、システマチックに検討できるようになっていて、その波に応じて潜堤や離岸堤などの構造物にどれぐらいの大きさのブロックを使うなどの設計ができるようになっています。

Q: 先生の研究所では、世界最大級の津波の装置で実験されていますが、そういう装置を併用しながらいろいろな波の形をシミュレーションしていますか？

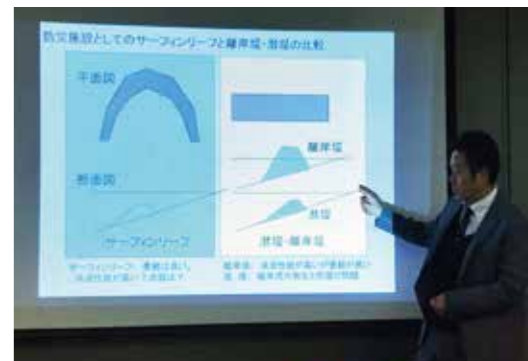
鈴木: 水路や水槽はさまざまなものがあり、大きな波を起こせる水路があります。また平面的に、先ほどお話ししたサーフィンリーフのように屈曲した構造物を検討できるような平面的な水槽があります。最近では3次元的な波の変形を計算できる数値シミュレーションが発達してきていて、この20年間でだいぶ変わってきたという気がします。

Q: 費用対効果として自然素材を使ったり、それを新しい「磯焼け対策」の素材を選ぶことによって、「環境」に負荷がかからないようにしていくのは、ひとつの方向性であるかと思いますが？

鈴木: 生物が付きやすい材料など、そういう素材がいろいろな環境の研究の中で進められてきていると思います。それを含めて構造物を造っていくことが、もしかすると、今後有効になっていくのではないかと思っています。



インタビューを映像で観る



鈴木高二朗さん。博士（環境学）、港湾空港技術研究所沿岸水工研究領域長、耐波研究G長（兼）

Photo by JNEPS

「自分の身にならないと、
きれいにする気にならない。
でもきれいになった海で遊ぶと、
マイゲレンデになる」

——— NPO 海岸クラブ 真壁克昌さん

ウインドサーファーの真壁克昌さんが逗子にやってきたのは、今から 45、46 年前だ。当時の逗子海岸はゴミだらけだったという。「ゴミがすごい多くて、犬のフンを踏んだりゴミを蹴っ飛ばしながら海に出ると、今度は、川から流れてきた洗剤であぶくだらけ。僕としては、きれいな海でウインドサーフィンをやりたいなと思っていたら、ちょうど逗子海岸では掃除のおばさんが 3 人ほど臨時職員としてゴミ掃除をしていたので、それを手伝ったりしながら、自分が遊ぶエリアだけでもきれいにしていました」

きれいな海でウインドサーフィンをやりたいという思いで海岸清掃を続けていたが、そのゴミの量がトラック何台分にもなるような時代で、汗を流して海岸清掃を続けるボランティアという概念に真壁さんは疑問を感じはじめた。「ボランティアというのは、人のために善行をおこなうというのは偽りですから、偽善者なんです。だから自分たちのためにやろうぜ!ということになったんです」

真壁さんが NPO 海岸クラブを作ったのは、20 年ほど前に井坂啓美さん（通称ドジさん、故人）との出会いの中で、井坂さんのビーチクラブをともに運営するためだったという。「ドジさんのビーチクラブを逗子海岸で運営するにあたって、ボランティアを募集しなくてはいけないので、新たに受け皿として NPO 海岸クラブを設立しました。1、2 年で終わるのかなと思いましたが、いまでもボ

ランティアの皆さんは手弁当でやっています」

ビーチクラブの活動は、フラダンスやヨガ、サーフィン、ウインドサーフィン、カヌー、ヨット、シーカヤックなど多岐にわたるスポーツの無料体験が主なもので、最近で SUP など無料体験ができる。「無料体験会をやるのが土曜日で、毎月第 1 土曜日が逗子、第 2 土曜日が茅ヶ崎や平塚など、ビーチクラブの活動は日本全国で 13ヶ所ありますが、僕は逗子だけで手いっぱい。多いときで 500 人ほどの参加者がいて、もうボードが足りないというほどでした」

逗子海岸での活動のルーティンはまず海岸清掃からはじまる。「海岸クラブでは、毎月第 1 土曜日の 9 時半から 10 時までにはゴミ拾いをして、あとは海で遊びましょうということです。自分の身にならないときれいにする気にならない。でもそこで遊ぶと、マイゲレンデだとかホームゲレンデになっていくんです」

真壁さんは、子どもたちに海岸のゴミ拾いを頼むにはそれなりの説得力のある言い方があると、その極意を語る。「今、逗子でゴミ拾いをして、ここだけがきれいになってもらうかと思うかもしれないけど、今、拾わなかったゴミは波が来たら対岸に流れちゃうし、さっき拾ったのは向こうから来たゴミだよ。向こうから来たあっちへ行ったりしているうちに世界中にゴミが出でしまう。『今、世界中でどのぐらいのゴミが出ているの?』と訊か

れたら、1 億 5000 万トンだと教えています。今、世界の人口が大体 80 億人だから、1 人 20kg 拾ってくれば、海岸のゴミはなくなる。僕は年間大体 300kg から 500kg のゴミを拾っています」

一緒に運営していたビーチクラブの井坂さんが急逝した今、真壁さんは NPO 海岸クラブを発展的に改組したいと考えている。「継承していきなきゃいけないものもあるので、例えば、今やっていることは経済的にも人材的にも非常に社会貢献になっているからです。ドジさんが生きているときに考えていた組織があります。会員の中には、スノーボーなど山のスポーツをやっている人もいるので、アーススポーツ・コーディネーター・アソシエーション、イーサカ (ESCA) という組織を考えています。ドジさんが生きているうちに、無料会員を 5 万人にしようと言っていたのに亡くなられたので、まだ 3~400 人なんです」

最後に真壁さんはビーチクリーンの運動を続けるにあたり、次のように語ってくれた。「もう逗子海岸はけっこうきれいですが、50 人、100 人でやると、やはりゴミの山になるんです。だから、短い時間でやってもらっています。『5 分、10 分でゴミがこれだけ山になったでしょう。だから、節電や節水も同じで、少しだけやってもしょうがないと思わずに、みんながこうして少しずつやることで、地球温暖化対策になるんだよ。頼むね』と子どもたちに言ってます」



Photo courtesy : FB of Beach Club

環境省などと連携して行われた「海ごみゼロ」のイベントでビーチクリーンの話をする真壁克昌さん



小田原、Photo by Naoto Yoshida



大磯、Photo by Naoto Yoshida

吉田直人

1994 年生まれ。
幼少のころから世界に興味があり、中学生で一人旅を始める。
高校卒業後、外資系大手企業に勤めるが 3 年で退社し、無期限の海外放浪を敢行。旅の途上で自分の経験を表現する手段を模索する中、写真に出会う。

受賞歴

APA アワード 2018 写真作品部門 - 奨励賞
Incredible India 写真コンテスト - 最優秀賞
日経ナショナルジオグラフィック写真賞 2017 - 優秀賞
スペイン大使館協賛写真コンテスト - 最優秀賞

吉田直人さんの写真展のお知らせ

葉山・一色ベースでは吉田直人さんの写真展の開催を予定しています。
2022 年 9 月 10 日 (土)~9 月 25 日 (日)



Photo courtesy: His Web Site



森戸、Photo by Naoto Yoshida

300年以上の歴史をもつ葉山の老舗日本料理店、日影茶屋の若き社長、角田晋之助さんの自然環境に対する意識は小さいころから育まれていた。「僕は、幼い頃からずっと葉山で育っていて、遊び場といえば海でしたので、幼いときから海や自然環境は近い存在にありました。また学生のときはずっとサーフィンをしていたので、ビーチクリーンといった活動にも参加してきました」

磯焼けの問題や地元で獲れる地魚の漁獲の減少など、角田さんが地元の海の自然環境の悪化を認識するようになったのは、日影茶屋の仕事を始めてからだという。「日影茶屋の仕事を始めてから、仕入れなどで漁師の方々と話をする機会が多くなりました。そのなかで、今の磯焼けの問題などがあることによって、魚の漁獲量が減ったり、サザエやアワビ、ワカメなどの海藻類が年々獲れなくなっていることを知りました」

磯焼けや海水温度の上昇などの海の自然環境の悪化の問題は世界規模の課題ではあるが、それでは自分に何ができるのか、角田さん自身、自問した。「環境問題は日本全国、世界での共通の課題だとは思いますが、世界規模という、自分が何か動いてできるということではないので、まずは地元でアクションを起こしたいと考えました」

角田さんはアマモ協議会の山木さんを紹介されて、以前から日影茶屋が取り組んでいる循環型の食品資源の再利用システムを活用する協力をはじめた。これは日影茶屋などの関連施設から廃棄される野菜や魚などの生ゴミを業務用の生ゴミ処理機で処理した堆肥を農家に配布し、その農家で育てた野菜類を仕入れるリサイクル型の「ヤサイクル」というシステムだ。「横須賀の会社が堆肥を作る機械を販売し、その機械でできた堆肥を回収して、成分を調整した堆肥を地域の農家さんに お渡しして、それで育てた野菜を今度は卸で販売されているという事業をされています。そのシステムでできた肥料は、それだけではなく、葉山などの小学校で食育の畑を作ることにも使用されているようです」

先日、角田さんと真名瀬の漁師たちと

協力して、真名瀬湾で磯焼けの原因のひとつであるウニの駆除をおこない、そのウニの処理にこの生ゴミ処理機を利用して堆肥として再利用したという。

「真名瀬の女性の漁師、畠山さんから聞いた話ですが、『以前は、葉山にも魚市場があったので、魚介類などを水揚げができる市場を将来的には作りたい』と聞き、僕はすごく共感しました。年々、漁業に携わる方も減ってきているので、葉山、三浦半島全体ではあるんですけど、そういう取り組みをしている漁協の方々とも協力ができたらと思っています」

最後に、地元葉山で長い歴史をもつ日影茶屋の社長として角田さんは、これから地元とともにどうしたら継続的に繁栄していけるのか、次のように抱負を語った。「うちももう、日影茶屋は私で11代目です。江戸時代からずっとこの地で商いを続けてきているので、やはり地元の人にとって、葉山に日影茶屋があって良かったと言ってもらえる会社にしていきたいと思います。あとは、少しでも葉山、そして三浦半島などの地域全体で何かできることがあればと思っています。やはりそこには、地元の食材を使ったり、頑張っている農家さんや漁業の方々から食材などを仕入れさせてもらって、全体が継続的に動く地域環境ができればいいなとは思っています」

「地域と共生しながら、継続的に動く循環型地域環境の構築をめざしていきたい」

日影茶屋 角田晋之助さん



Photo by T.T

真名瀬漁港で、ボランティアの方々に駆除したウニを堆肥に代える手順を説明する角田さん（左から2人目）



「ヤサイクル」の生ゴミ処理機は10年以上前から導入され、「日影茶屋」とレストラン「ラ・マーレ」の2カ所に設置されている。駆除されたウニもまたこの処理機で堆肥としてリサイクルされている



インタビューを映像で観る

「海から岸を見たときに松林と山だけなので、御用邸がある一色海岸は静かで美しいビーチです」

一色ボート 齋藤淳太さん



Photo by T.T
サラリーマン生活からの脱サラで生活が大きく変わった一色ボートの齋藤淳太さん

葉山で生まれ育った齋藤淳太さんが大学卒業以来、続けていたサラリーマン生活に転機が訪れたのは、今から4年前だった。「嫁さんの実家は『とめぞう丸』という民宿をやっている、漁師だったおじいちゃんの世代から民宿を営んでいます。義父の弟が釣り客向けのボート屋をやっている、ボート屋は漁師と同じで世襲制なんです。それで、『誰かボート屋を継がないか?』という話がでたので、自然の成り行きで僕が手を上げました」

齋藤さんは20世紀フォックス系の会社や「ディズニー・ジャパン」、スパイダーマンのコミックを扱う「マーベル・ジャパン」、ゲーム会社の「カプコン」、そしてボート屋をはじめようと思ったときは、MTV やパラマウント映画などを傘下に持つ「パイアコム」という会社に勤めており、いわゆるキャラクタービジネスの世界にいた。「ボート屋の話が出たときは、最初は悩みましたね。収入はお天気任せ、サラリーマンとは違い、毎月銀行に給料が振り込まれるわけでもないし、嫁さんにも『楽しんでいる場合じゃないわよ。結果よ』といい顔をされていません。でも僕は楽しんでいます。楽しまないと、仕事はできないから」

収入が半減しても脱サラをしてボート屋を継ぐ決断に至った齋藤さんの背中を押したのは、彼自身の生活環境にあったのだろう。「僕は昔から海で遊ばせてもらってました。中学のときにはじめてサーフィンは今でも続けていますし。だから、ボート屋などだれもやりたがらないけど、僕は『面白そうだからちょっと

やろうかな』というのが最初でした」

齋藤さんが一色ボートを継いで、最初にはじめたのが、貸したボートを監視するためのボート小屋の建設だった。「はじめた当初、ボート小屋もなかったので、まずボート小屋を建てて、ボートのレンタルをはじめました」

齋藤さんの生活は激変した。週5日の東京への通勤がなくなったかわりに、朝6時には一色ボートのボート小屋を開けなければいけなくなったからだ。「ボートを借りる人の9割がたは釣り客で、釣りの人たちは朝が早いので、毎朝6時にはボート小屋をオープンさせています。漁師は朝6時までに網を上げにいったので、昔から漁師との協定で朝6時から着岸3時と営業時間が決まっています。それで、僕がスタッフが毎朝6時前にボート小屋に来て、一色の海の風や波の状況などをSNSなどでアップしています」

もともと齋藤さんはビーチクリーンなどの活動に参加していたので環境問題に関心はあったが、一色ボートをはじめてからは自然環境に対する意識がもっと身近に感じるようになったという。「ボート屋をはじめるとは、波乗り仲間と一緒に兼倉でビーチクリーンをしていましたし、あとは葉山町が主催するビーチクリーンに参加していました。でも一色ボートをはじめるとは、ボートを借りる人のほとんどが釣り客なので、磯焼けなどで魚が釣れなくなるとお客さんも来なくなるので、海の環境問題はより切実になりました」

ボート屋の仕事は正月休み以外、ほぼ休みなしだという。齋藤さんは1年中ほぼ毎日、一色海岸の海を見ているということになる。そんな一色海岸の魅力とは一体なんなのだろうか。「御用邸があるから、住宅地がほとんど見えません。松林があって、公園があって、美術館もある。昔は全部御用邸の土地だったので、海から岸を見たときに松林と山だけなので、とても静かです。あと魅力的なところは、御用邸があるので24時間お巡りさんが周辺を警備しているので、それもすごく安心・安全なところですよ」

先日、CNNが実施した世界の厳選ビーチ100に選ばれた一色海岸は世界でも有数の美しい海岸として認定された。「世界の厳選ビーチ100で、一色海岸は66位に選ばれた美しい海岸で、富士山が望める夕陽は絶景です。CNNに報じられた後は、東京に住んでいる外国人の海水浴客が多くなったような気がします。それもメディアの力なんですかね。ボート屋をはじめてから、月1回、第3日曜日の朝の9時から神奈川県的美化財団と協力してゴミ袋や軍手を配布してビーチクリーンをやっています。葉山町民以外の方でも散歩がてらに気楽に参加してください。僕は、1年365日、一色海岸の日々の変化を見ているので、どんどんきれいになる海を今後発信していきたいです」



インタビューを映像で観る



Photo by T.T

アマモの再生事業を手伝うためにダイビングのライセンスを取った徳永淳二さん

「Think Global, Act Local」 — 自然環境問題はまさに世界的に考えて、 地域で行動しようということです。

—— 逗子ロータリークラブ 徳永淳二さん

逗子ロータリークラブ会長の徳永淳二さんが環境問題に目を向けはじめたきっかけは趣味の釣りだった。「僕は逗子や葉山の海で釣りをして遊んでいるんですけど、昔のように魚が釣れない。僕が下手くそなのか、魚がいないのか？でも、魚が釣れるほうがいい。魚が減ったり、磯焼けの問題など、海の環境の変化を考えなきゃいけないなと思いました」

徳永さんは3人の子どもの父親でもある。自分の愛する子どもたちには、今ある自然環境をより良くして残してあげないといけない、親心に誓った。では、自分になにができるのだろうかと自問したという。「まず、逗子や葉山、鎌倉も沖は一緒ですけど、地球の自然環境という大きすぎてわからなくなるので、まず身近な相模湾のすぐその海の生き物とか、海が実際にどうなっているのかをまず知る必要がありました」

昨年、逗子ロータリークラブは60周年を迎え、その記念行事を任されていた徳永さんは子どもたちを対象にした自然環境セミナーを企画した。「江ノ島水族館の方たちは相模湾周辺の海を潜って動画や写真をたくさん撮っていたり、さまざまな活動をされているので、まず近くの海の現状がどうなっているのかを知ろうと、江ノ島水族館の方を逗子にお呼びして、子供たちに自然環境の考えるきっかけを作ろうと、逗子文化プラザで『えのすいと考える逗子の海と生き物セミナー』を行いました」

昨年7月に行われたセミナーは大盛況だったという。「実際セミナーをやると、たくさんの質問が出ました。子どもたち

は、自然環境にこんなに関心があるんだということを知られ、これをさらに発展させてあげたいと思いました」

自然環境セミナーは都合3回にわたって実施された。2回目は昨年の11月、漁業体験セミナーをおこない、父兄も入れて総勢100名程が参加した。「小坪漁港の漁師さんに協力してもらって、刺し網漁をやりました。そこそこ魚は獲れましたが、子どもたちは、ぴちぴちと跳ねる魚のほうが興味あるみたいでした」

3回目は今年の2月に江ノ島水族館のバックヤードツアーを実施した。「江ノ島水族館に行って、ビーチクリーンを体験したり、江ノ島水族館の裏側を見るバックヤードツアーに参加して、生き物たちがどういうふう水族館の中で生きているのかを見学しました。実際に自然環境で生きるということと、水族館で生きるということは違いますが、その違いを見ることによって、生き物は循環しているというようなことを学びました」

こうしたセミナーを通じて徳永さんは、日本全国いろいろな場所でアマモの再生に取り組んでいて、相模湾でも行われていることを知り、個人でもそういう活動に参加したいと考えたという。「葉山で10年ほどアマモの再生活動をしている葉山アマモ協議会の山木さんを知り、自分自身、アマモの再生を手伝うために初めてダイビングのライセンスを取りました。それから、アマモの再生をやったり、ワカメの養殖をやったり、ウニの駆除などをやりました」

アマモの再生活動などに参加した徳永さんが感じたのは、環境改善の対策はな

かなか難しいということだったという。「小坪漁港の漁師さんは、『再生をやることは大事だから手伝うけど、海の環境が変わっているのに、いくら植えたって定着するわけがない』と言われました。これをやればいいというのが、今はない。でも試行錯誤しながらやっていくことは、すごく大事なことだと思います」

こういった活動をしていくなかで、徳永さんは環境問題にたいして確信めいたことを感じている。「個人的には、現場を見ないとなかなかわからないので、アマモや海藻類の再生活動には参加します。また、そういった現場の紹介を子供たちにやっていこうかと思っています。一番大事にしたいのは、子供たちが考えるきっかけ、みんなが意見を言うきっかけを作っていきたいなと思っています。今年も7月30日に第2回のセミナーを逗子のなぎさホールでやる予定です」

先月、徳永さんはアメリカで行われたロータリークラブの世界大会に参加し、環境問題に関するグローバルな活動を見聞きしてきた。「世界ロータリークラブが海洋環境をテーマにアイデアを募集しているので、そのコンペに応募しようと考えています。それから、中高生たちのシンポジウムを企画しています。ズームもあるので、世界の高校生を繋いで、『Think Global, Act Local』、世界的に考えて、地域で行動するというのは、まさに自然環境問題はそこにあるわけです。彼らに『Think Global, Act Local』のきっかけを与えていきたいなと思います。次の世代に繋げなければいけないのはやはり大人の責任ですから」



ボート小屋からの
一色海岸の海の風景、
1年365日。



All Photos by Junta Saito





私たちが海の自然環境の再生に協力しています。

造園事業・環境事業
Zushi Garden




有限会社 逗子ガーデン
〒249-0001 逗子市久木 4-17-49
TEL: 046-873-4128

おかげさまで創業 120 年
これからも地域の皆さまとともに

SUZUKIYA
M A R K E T

スズキヤ逗子駅前店 046-871-3315
スズキヤ東逗子店 046-871-0658
スズキヤ薬山店 046-877-3311



ELECTRIC



逗子菊池タクシー株式会社
菊池地所株式会社
逗子市久木 1 丁目 3 番 6 号

株式会社 **キリガヤ**
逗子市山の根 1-2-35
☎046-873-0066



キリガヤ HP
<https://kirigaya.jp>

KIRI GAYA
LIVE WITH NATURE

CultTiO

駅から2分のレンタルスペース

〒249-0006 神奈川県逗子市逗子5-2-48 キングプラザ4F
株式会社キングコーポレーション



田中歯科クリニック




SURFERS

Beach Sprint Rowing Games 2022 Hayama

Beach Rowing Sprint Games 2022 Hayama



日時：9月17日(土)・18日(日)
主催：葉山コースタルローイング実行委員会

LAND FOR SALE

PLEASE CALL 046-871-3122

REAL ESTATE OF **SAKUMA**
SINCE 1950

Pray for surf!
NAMI-ARU?

無料トライアル実施中



Blue Moon
once in a
Big family Co., Ltd.

ZUSHI HONDA 立
(有)山上輪業
☎046-871-2912

逗子スポーツクラブ

住和不動産株式会社
ヨークマート東逗子店前

Total Beauty Salon
ARIREINA




一色BOAT

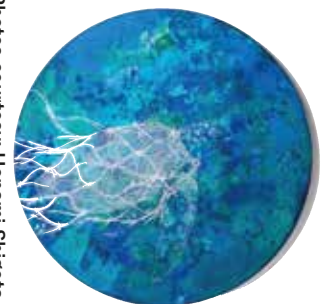


スタンドアップパドルサーフスクール
逗子SUPスクール
小学一年生から体験できます！



ご予約・お問い合わせ
〒249-0007 神奈川県逗子市新宿2-11-5
0120-71-1173
Mail:sz@sup-zushi.school
HP:https://www.sup-zushi.school
営業時間:9:30-18:00

※掲載はアイウエオ順になります



Photos courtesy: Honami Shigeta



インタビューを映像で観る

「海の生き物をモチーフにすることで、

命のつながりを表現しています」

水干(すいひ) 絵の具を地層のように塗り重ね、デザインナイフで掘って削り、白い線画を描き出すミクストメディアという現在の表現方法にたどり着いた。下地を作るのに最低3週間が必要で、線を彫るのはモチーフのサイズによるが2~5時間ほどかかる。彫る時間よりも着彩に時間をかけているという



楽器名「ンゴニ」。もちろん演奏できる。高知県室戸市からフジツボがついた状態でやってきた

繁田穂波さん

水棲生物画家



Photo by JNEPS

水棲生物というのは水に住まう生き物という意味で、広い意味では人間も含まれています。命のつながり、循環を作品のテーマにしています。すべての生き物は海から生まれたので、少しずつさまざまな生き物を描いていくという展望のなかで、今は海洋生物を描いています。海洋生物を描くことに惹かれた理由は、海辺の心象風景や命が海から生まれて海に還っていくというメッセージとして伝えたくて、海の生き物をモチーフにすることで、命のつながりを表現しています。

水棲生物画家・繁田穂波さんのプロフィール
パンデミックを経て、生き物や環境への配慮からボールペン画を手放し、日本画顔料とスクラッチを掛け合わせたミクストメディア作品の制作を始める。塗り重ねた絵の具の地層は経過した時間を表し、それを削り彫ることで時間を遡るという意味合いを持たせている。生命は海から生まれ、海へと還ることから、水棲生物をモチーフとすることで全ての生き物は繋がっていることを表現している。

繁田穂波さんの絵画展が葉山で開催。
葉山・一色ベースでは、繁田穂波さんの絵画展を来る10月8日(土)~10月16日(日)まで開催予定です。

繁田穂波さんの画集のクラウドファンディング
繁田穂波さんの初画集の出版をクラウドファンディングで募集しています。詳しくは Space Utility TOKYOまで。2022/9/16(金)~

クラウドファンディングのURL



ウキはプラスチックなので、水干では着色できない。現在は塗料を用いているが、ゆくゆくは自然に優しい画材で描きたいという。アップサイクル・アート

編集後記

今回、『しぜんかんきょう』誌の逗子・葉山特集号に、ご後援を賜った逗子市及び逗子市観光協会、並びにスポンサーいただいた企業の方々に深く感謝申し上げます。また、この企画を進めるにあたり多大なご支援をいただいたNPO アイデアリーフ代表の田中俊樹さんに感謝申し上げます。

さて、対岸の火事に見えた地球サイズの温暖化問題や、プラスチックゴミ問題が、ここ逗子・葉山の身近な生活環境に深く関わっています。今の逗子・葉山の美しい山・川・海、そして風や波の中で遊べることに感謝し、これからは、ただ見守り放置するだけではなく、より良い自然環境を再生し、創造する活動に理解を深めていただき、ご協力とご支援、ご参加を賜れば幸いです。そして、それは難しいことではなく、気づいた人から浜辺のゴミをひとつポケットの中に入れて持ち帰るような小さな行動から始められます。「We LOVE Zushi-Hayama♥」。私たちと未来の子どものためにECO Motion! (文:森下茂男)